

子供とレクリエーションの研究

相 場 均

一

昨年八月に發足したレクリエーション研究會の研究狀況に關する綜合報告として發表することにする。

研究は理論的な方面と技術的な方面から進められて來たが實際には、この二つに分けて考えることは出来ない。しかし一應順として、理論的な問題から、技術的な問題に話をすゝめて行きたいと思う。始めに、いつたいレクリエーションとはどんなものであるかについて考へて、この問題をひろげて行くことにしよう。

『レクリエーション』とは原語の上では、ふたゝび創造すると言ふ意味で、普通疲れた時などに、精神的にも、肉體的にも、新しい力をよみがえらせることを言うのである。第一次世界大戦によつて、アメリカの産業が非常に機械化されて工場において、充分な餘暇が得られるようになった。この餘暇と言ふものを、どのように善用したらよいだろうか、と言

う問題から、レクリエーションが眞剣に考へられて來るようになって來た。つまり餘暇を、たゞ不經濟につかつてしまわないで、今までの勞働の、精神的な肉體的な疲れをいやし、明日の糧にしようと言ふ試みだつたのである。レクリエーションの問題は、こうして、とみに盛になつて來たのである。さて、では子供、特に幼児の場合、このレクリエーションの問題は、どのような角度からとりあへられるべきであらうか。ある教育學者は、「レクリエーションの問題はもともと成人勞働において起るべきものであつて、プレイを生活の主要部分として、學習を自分の生活の全部とする教育をうけている子供や青年においては、レクリエーションの問題はたいして重要ではない、つまり、生活全體が、教育の對象であつて、勞働ではないからである」と言つてゐるが、本當に、子供にとつてレクリエーションはあまり重要な問題ではないのであろうか。わたくしたちはむしろこうした考へとは正反對であるのである。實際、子供には仕事の氣ばらしなどはない

のであるが、子供の遊びそのものについて考える時に、けつしてレクリエーションの問題は無視出来ないと思う。更につきすめて言うと、子供の生活は全てレクリエーションなのだと言え言える。子供、特に幼児を観察していると、何か近い將來の目的の爲に、自らを犠牲にして、静かにしている、と言うことが、全くあり得ないことがわかるであろう。つまり、幼児はたえず遊んでいるのである。更にこのことを考えてみると、幼児が遊ぶことは、遊びと同時に、成長し、そして學んでいることに気がつくのである。遊ぶことが、成長のための勉強なのである。電車ごっこをしたり、おまじごとをするなどは、子供の大人世界の模倣であるかも知れない。又實際、子供の遊び程度大人の世界の様相を反映するものはないのである。しかし、こうした遊びは、又同時に、その子供たちにとつては、空想であり、そうして創造でもあるのである。つまり、こうして子供たちは、遊んで、成長して、學んで行くのである。

一一

このことを考えて行くと、子供の教育に於ては、なにかを所謂教えこむと言うことは、無理であることがわかつて来る。たとえば、幼児體育の方からみても、所謂體操は、幼児にはほとんど効果をあげ得ないのであるから、こゝで、ストリーイ・ブレイなどのようにアクションの大きいゲームで、體育効果をあげようとしている。又、その他の分野でも全て

自由遊び的なもので、教育と言うものの効果が考えられて來ているのである。

つまり、今私が言いたいのには、レクリエーションは、子供の教育のためには、一番大きな分野をしめていると言うことである。

であるから、何か、遊びをさせている時には、同時に、子供には氣づかれないように、充分な教育的な効果を豫想し、そのもとに計畫をたて、行かなくてはならないと思う。つまり、もし、子供達があるパーティを行うとすると、その時には、その子供達のグループ・ワークについて考えて、子供達の社會への適應化や規律化を考え、又、そのパーティの遊びが、一方にかたよつてしまわないように、精神衛生的な、心理學的な配慮も必要であり、又醫學的に、ゲームの組合せとその姿勢運動量なども考えなければならぬのである。そのように要素的にこまかくレクリエーションの基礎を分析するとともに、今度は全體的に、その子供がおかれている社會的な環境も考えてやらなくてはならない。幼児でさえも、抽象して、一つの個體だけとして考えるのではなく、ある社會と言う場の中に置かれた一人の子供として、考えるべきである。

以上のべたことは、子供の遊びのことなどが、意外な程、専門外の人には、たゞの遊びぐらいにしか考えられていないので、特に強調したわけである。一般にレクリエーションなどは、たゞ子供を遊ばせればよい位にしか考えられていない

ので、現在の日本の段階では、レクリエーションの言葉の流行が盛なのにくらべて、あまりにも理解されていないように思われる。

次にもうすこし具體的な技術的な面について、多少おこなわれた調査を基礎にしてふれることにしよう。

三

それは、いつたいレクリエーションが、精神的にも、肉體的にも、どんな影響があるだろうか、についてなのである。レクリエーションの理論から言うと、遊ぶことによつて體や心が悪くなるのでは困るので、その逆でなければならぬのである。われわれは、實驗的な効果をよく調べる必要上から特に精神薄弱兒のみに對して、約半年程、組織的にレクリエーションを行つた。この結果、心理學的な體育學的な検査も一應やつたが、所謂検査の上の數字では特に變化をみなかつたが、精神薄弱兒にありがちな、あの動作のにぶい、消極的な態度だけは、かなりとれて來たようであつた。われわれとしては、數字的に効果を示せず、多少失望したが、精神薄弱兒教育の専門家の立場では、その消極的なにぶい動作を多少なりともなおして行けたことは、大きな効果であるそうである。たゞ研究上の必要から、普通兒童と、精神薄弱兒の體育學的な差を調べたが、一般的にはるかに精神薄弱兒の方が劣等であつたが、特に巧緻性のテスト成績は劣等であつた。

以上のべた實驗により、多少なりとも、精神薄弱兒のため

のレクリエーション・ゲームがどのように組立てられなければならないかの見通しが出來て來た。

尚、そうして、多少なりとも異常で健康ならざるものに対するレクリエーション効果を考へるときに、治療のちちはの人からは、遊戯治療と言ふものが考へられるのではないかと思はれる。しかし逆に言つて遊戯治療がレクリエーションと同じであることにはならない。しかし、レクリエーションの臨牀心理學的な、又、醫學的な基礎を考へるためには、この遊戯治療の問題は重要だと思ふ。

實は、あまり實驗的研究がないため、ほりさけて述べられないが、ゲームの組方によつて、性格治療なども考へられるのではないかと思ふ。たとえば、劣等感の強い子供に、支配的な立場に立てるゲームをしくんでやるなどのように、將來の臨牀心理學的な操作技術の發達によつて、かなり有效な分野になると思ふ。又、そのようなゲームに、精神分析學的な操作も加えられるようになると思ふ。

更に、醫學の分野でも、それぞれの缺陷などに應じて、色々にゲームをつくることも出來ると思ふ。

四

このように、精神薄弱や、その他心身が悪いものためのレクリエーションは、その分野では頗る意義あるものであるのに、一般には關係ないではないか、と言ふ意見も出て來ると思ふ。

しかし、こうした實驗や研究は、普通の子供のレクリエーションの研究のためにも、頗る重要な資料になるばかりでなく、こうしたケース・スタディ的な考えをも、實はもつと、もつと、レクリエーションにとりいれるべきだと思つたのである。たとえば、ある一つのグループでゲームをするにしても必ずその中には、色々な性格や特徴をもつた子供が、それぞれいるはずである。特に保育の問題に於いては、その一つ一つをスポイルすることなく、しかもグループ全體を育てなければならぬのであるから、必ず、どの遊びの中でも、一人一人の子供にも注意をはらつて、その特性から、そのグループ・ワークに於ける位置をきめてやらなければならないと思つたのである。

以上、だいたいままでのレクリエーション研究會の研究活動を通じて、述べられることを、調査研究を受持つ一委員として、發表した次第である。

参考文献

- J. R. Sharman, Introduction to Physical Education, 1934.
- G. D. Butler, Recreation, 1943.
- The 2nd Report of the central advisory comitee for Education 1948.
- Recreation, a monthly magazine. (U. S. A.)
- 前川峰雄、體育とレクリエーション(學校體育)一九四八

年

垣内芳子編、子供とレクリエーション 一九四九年
など。

(三十二頁より)

(竹田氏稿つゞき) 第一部の問題が保育に關する知識の度を示すものとすれば、第二部の問題は保育的知識を通しての適應性をあらわすものと見なされる。このような適應性は年少時においても乏しく、また年長者においても乏しくなる。新しい保育の方法、新しい保育の領域についての教養が一般に貧困であるという事實が指摘された以上、この適應性の大きな年齢において保育を再教育し、その教養を高めることがここに要望されなければならないであろう。

(四十五頁より)

(シンボジウムつゞき) 最高のように二人の約束に權威がある。グループを作つて生活する時には子供たちの約束をして憲法を作り、それに従えぬ時はグループがさばく。全體の自由からえらんだ約束が權威を持つ。つくりしものとつくられしもの、神の前に犯すことの出来ない權威もある。

權威、躰、自由、あらゆる角度より考え、それぞれの場に於いて考え、實施しなければならぬ。今日の會でよい生きた問題を與えられた事を心からうれしく思います。(拍手)